

## 人生の精進の道づれ

中込昭子

東京都・六七・無職

あの時、お別れしたのは、秋田市将軍野しょうぐんのの町外れでしたねえ。このころ草の穂が露の重さに深く垂れていて、露の小さな丸い粒々が早い朝の光にキラキラして、そこいらじゅう輝いて、二人でしばらく息を吞んで立っていたこと、おぼえていらっしゃいますか。

あの時、私は「何年か後に、また、こんな朝にここに二人で立って、いまのように二人のかげぼうしを、もうちよっと近づけて、このころ草の光る露の上になうつしい」と思っていましたのに。なんにも言わずに、言えずにいたのでした。あれからの歳月はかぞえると悲しいほど経ってしまいましたねえ。あなたはあなたの道を、私の道を、互いにじぐざぐ廻り道の多い人生でしたねえ。

いつか、あなたがおっしゃいました。「眠れない夜の闇に、長い長い手紙を書いて、いるんだよ」って。それからの私は、都市の騒音も静まる夜半に、軽く目を閉じて、

あなたの長い長い手紙を読んでいます。ときには、日本海の荒波の音をバックミュージックにしたり、ときには、都市の家並の隅から聞こえる虫の音に、ふっと涙を誘われたりしながらねえ。

バカだなんてお思いでしょうね。私もバカねえ。ふふふんと、ひとり寝返ることもあるのよ。

夫でもない、妻でもない。あなたと私の関係は、人生の精進の道づれだったのよねえ。ありがとう。ほんとうに、ありがとう。お元気でいらしてくださいね。

さようなら

\*少年少女の頃、詩をかく仲良しの二人でした。彼は一男一女の父、私は一男の母。一年に一度ぐらいは会うチャンスがあります。